HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

タイトル	悪魔の手先フリッツ・フィアラ ― 書誌的研究試論 ― … ミハル・シュヴァルツ
著者	木村，和範；KIMURA，Kazunori
引用	季刊北海学園大学経済論集，70(4)：195-215
発行日	2023-03-31

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

《翻訳》

悪魔の手先フリッツ・フィアラ❖

── 書誌的研究試論* ──

ミハル・シュヴァルツ*
木　村　和　範**(訳)

1．医学からジャーナリズムの世界へ
2．『国境通信』紙の主筆，ナチス諜報機関の協力者
3．ルポルタージュ「東方のユダヤ人とともに」
4．イスタンブールでの二重スパイと連合国への亡命
5．チェコスロバキアへの引渡，裁判，判決，西ドイツでのチェコスロバキア防諜の秘密工作
6．「褐色」の過去の影

ヨーロッパ・ユダヤ人の大量殺戮という最も恐るべき犯罪を隠蔽しようとしたフリッツ・フィアラは，国家社会主義者があの忌まわしい犯罪に手を染めた20世紀全般の歴史の中で永遠にその名を留めている。ホロコーストを扱ったほとんどすべての重要な著述の中に彼の名前が登場する。しかし，これまでのところ，特異で少しく捉えどころのないこの人物については，本格的な歴史研究は行われていない(1)。フィアラは，ブラチスラバで

❖ 本研究は，「19世紀・20世紀のスロバキアにおける政治エリート層ならびに社会エリート層の連続性と不連続性（Kontinuity a diskontinuity politických a spoločenských elít na Slovensku v 19. a 20. Storočí)）」（課題番号 APVV-14-0644）および「スロバキアにおけるホロコースト研究の諸問題 ── 方法論的・用語論的アプローチの起源 ──（Problematika výskumu holokaustu na Slovensku: genéza metodologických a terminologických prístupov）」（課題番号 VEGA SAV No. 2/0133/12）の研究成果の一部である。著者は，スロバキア科学アカデミー歴史研究所研究員。

［原典の書誌情報は以下のとおり。Michal Schvarc, “Fritz Fiala: A Man in the Service of Evil. (An Attempt at a Biographical Study),” in: Ján Hlavinka, Hana Kubátová, and Fedor Blaščák (ed.), *Uncovering the Shoah: Resistance of Jews and Efforts to Inform the World on Genocide* (*Proceedings from the Conference Žilina, Slovakia, 25-26 August 2015*), pp. 88-110. ジリナにおけるこの研究会の主催団体は International Christian Embassy Jerusalem と Historical Institute of Slovak Academy of Sciences であり，研究会の開催と論文集の刊行には Conference on the Jewish Material Claims to Germany からの助成を受けた。訳文中の［　］内と各章の番号付けは訳者による。翻訳出版は原著者の許諾済み。］

＊Michal Schvarc, Institute of History of Slovak Academy of Sciences
＊＊本学名誉教授

(1) たとえば Jäckel, Eberhard und Longerich, Peter (eds.), *Enzyklopädie des Holocaust, Band I,* München: Pipper, 1995 ではフリッツ・フィアラは取り上げられていない。Hilberg, Raul, *Vernichtung der europäischen Juden. Band 2*, Frankfurt am Main: Fischer Taschenbuch Verlag, 1990, p. 789（望田幸男・原田一美・井上茂子訳『ヨーロッパ・ユダヤ人の絶滅』（全2巻）柏書房，1997年，下巻47頁）では，その名前だけが，1943年6月2日付のアイヒマン書簡に登場している。［同上訳書の関連部分は以下のとおり。「…… この種の視察［占領地

発行されていたドイツ語日刊紙『国境通信(*Grenzbote*)』の主筆であったこと，そして1942 年後半にアウシュヴィッツ複合収容所を訪れたこと，さらには「東方」にいたスロバキアのユダヤ人の状況について虚偽を宣伝するための連載記事を執筆したことで，その名前が出てくる[(2)]。フィアラとは何者か，その生い立ちはどのようなものか，なぜナチス体制に同調したのか，なぜ彼が選ばれたのか，あの取材記事が 1945 年以降の彼の人生に与えた影響とはどのようなものか，さらに戦後から冷戦時代にかけて彼はどのような運命を辿(たど)ったのか。このような単刀直入の質問をした歴史学者はまだいない[(3)]。史料の限界性とフィアラの主張の疑わしさを考えると，これらの質問に答えるのはまったく容易ではない。さはさりながら，本稿では不完全でもその答えを述べることにしよう。

1．医学からジャーナリズムの世界へ

ウィーン生れ（1906 年 3 月 16 日生）のフリードリヒ・「フリッツ」・フィアラは，ホワイトカラーのドイツ人とチェコ人の混血家庭に生まれた。父方の祖先はチェコ人を自称していたが，フリッツ家の祖父母は社会的地位を高めたかったためか，1800 年代半ば以降になるとみずからをドイツ人と称した。フィアラのまったく信憑性のない伝記によれば，チェコ人の父親は，ハプスブルク帝国の崩壊後，ウィーンを離れ，新生国家チェコスロバキアの工業商業貿易省に勤めたが[(4)]，プラハに赴任したため，家庭は崩壊した。戦後のオーストリア共和国の不安定な状況の中で，フリッツが母親と二人の弟妹とともにどのように過ごしたかについては，入手可能な記録からは完全には明らかになっていない。また，フィアラが比較的高額であったウィーン大学医学部の学費をどのように捻出したのかも分からない。無事に卒業したのに，彼はなぜ医師を職業としなかったのか。その理由は謎である。

フィアラは，チェコ人の著名な彫刻家でシカゴ在住の叔父アルビン・ポラーシェク（Albín Polášek）の住まいに寄寓したが，そのことがジャーナリストになるきっかけとなった。フィアラ自身の言葉を借りれば，シカゴでは，1930 年に地元の大学で「電気外科」［電流による組織の切断・切除による外科施術］を学んだ。学業の傍ら，彼は新聞や雑誌向けの短い記事を書いた[(5)]。アメリカ社会を風刺した読み物が，イギリスの有名な週刊誌『日曜特報(サンデー・ディスパッチ)（*The Sunday Dispatch*）』

域のユダヤ人収容所にたいする委員会による調査］はすでにスロバキア語で『辺境の使者』（国外ドイツ人の新聞）の主筆フィアラによって行われたばかりである。」］

(2) たとえば，以下を参照。Lipscher, Ladislav, *Die Juden im Slowakischen Staat*, München: R. Oldenburg Verlag, 1980, p. 135; Rubin, Barry, *Istanbul Intrigues*, New York: Pharos Books, 1992, p. 199; Bauer, Yehuda, *Freikauf von Juden? Verhandlungen zwischen dem nationalsozialistischen Deutschland und jüdischen Repräsentanten von 1933 bis 1945,* Frankfurt am Main: Jüdischer Verlag, 1996, p. 152; Lozowick, Yaacov, *Hitlers Bürokraten. Eichmann, seine willigen Vollstrecker und die Banalität des Bösen,* München: Pendo Verlag, 2000, p. 176; Cesarani, David, *Adolf Eichmann. Bürokrat und Massenmörder. Biographie,* Berlin: List Taschenbuch, 2012, pp. 214–215.

(3) この点にかんする限り，ドイツの哲学者で歴史学者による次著は例外である。Stangneth, Bettina, *Zur Informations-, Freigabe- und Schwärzungs-Praxis des Bundesnachrichtendienstes im Fall der BND-Akten mit Bezug zu Adolf Eichmann*, pp. 13–15.（Available online: <http://kanzlei-partsch.de/de/cjp/wp-content/uploads/2010/07/130622-ASV-20-Stangneth.pdf>）

(4) SNA, S-428-2/1-12. フリードリヒ・フィアラの経歴。

(5) A ÚPN, I. správa Zboru národnej bezpečnosti (ZNB), [I. Report of the National Security Corps (ZNB),] 40194/21. F. フィアラの供述調書（1955 年 4 月 1 日）。

や『サンデー・タイムズ（*The Sunday Times*）』の目に留まり掲載された。これが，ジャーナリストとしてのキャリアへの扉を開くことになった。フィアラはアメリカから帰国したが，ウィーンには戻らず，チェコスロバキアに居を構え，自由主義の日刊紙として有名な『プラハ日報（*Prager Tagblatt*）』社に就職し，特派員としてカルロヴィ・ヴァリ［プラハの西約130㌔］に駐在した。この勤め口は，以前にオーストリア社会民主党の青年組織に身を置いたことのあるフィアラとは辻褄（つじつま）が合わないが，そのことは彼の性格が底なしの日和見主義者であることを示している。これをさらに裏付けるようなことがある。彼は，1935年5月の選挙でコンラート・ヘンライン（Konrad Henlein）を党首とするズデーテン・ドイツ党（Die Sudetendeutsche Partei：SdP）が大躍進した後，そこに入党したのである[6]。それにもかかわらず1945年以降になると，家計が苦しかったことを挙げて，入党を必死に隠蔽しようとした[7]。フィアラは，1935年末から1936年の初めころには，すでにドイツ党のジャーナリスト組合の代表として活動していたが，カルロヴィ・ヴァリでは『日刊ドイツ新聞（*Deutsche Tageszeitung*）』の主筆でもあった[8]。当初，これは不偏不党の新聞であったが，次第にズデーテン・ドイツ党の影響下に置かれるようになった。その主たる理由は，フィアラがズデーテン・ドイツ党の中で枢要な地位を占めたことによる。こうして，同紙の紙面には激しい反ユダヤ的な言辞が踊るようになった[9]。後に，フィアラは，イデオロギーに裏打ちされた過激な反ユダヤ主義者になったが，そのルーツはここにある。

1938年3月の独墺合邦（アンシュルス）［ナチス・ドイツによるオーストリア併合］後，フィアラはドイツ帝国国民となった。ジャーナリストとしてのキャリアに箔（はく）を付けるために，彼はドイツ帝国報道協会（Reichsverband der deutschen Presse）に会員登録し，ヒトラーの国家社会主義ドイツ労働者党（NSDAP）にみずからの意思で入党した[10]。後にフィアラは，チェコスロバキアの裁判所を騙（だま）そうとし，そしてその後には共産主義国家保安局を躍起になって欺（あざむ）こうとして，これらすべての事実とは真逆のことを言っている[11]。しかし，フィアラが反ナチス的見解に立っていたということを語るものは何もなく，1938年3月末にウィーンを訪問した宣伝相［ゲッベルス］にたいする皮肉っぽい発言なるものは，

（6）内務省の1961年6月30日付の記録には，フリッツ・フィアラが1933年11月5日に「ズデーテン・ドイツ祖国戦線（Sudetendeutsche Heimatfront）」［改称前のズデーテン・ドイツ党の党名］に加盟したという記載がある。彼は，明らかにズデーテンでの民族闘争における自分の功績に注目させようとして，ドイツ党幹部名簿の中でそのことに触れている。Archiv bezpečnostních složek (ABS), [Archives of the Security Forces,] Prague, 10-P-181を参照。

（7）SNA, S-428-2/1-12. フリードリヒ・フィアラの経歴。

（8）ABS, 10-P-181. 内務省の記録（1961年6月30日）Cf. SNA, S-428-2/1-12. フリードリヒ・フィアラの経歴。

（9）Tesařová, Michaela, *Zánik německého tisku na Karlovarsku v letech 1938 a 1945*, [The Disappearance of the German Press in Karlovy Vary in 1938 and 1945,] Diploma work. Univerzita Karlova Praha: Fakulta sociálnych vied, 2013, pp. 50-54.

（10）ABS, 10-P-181. 内務省（MV）の記録（1961年6月30日付）。

（11）SNA, S-428-2/1-12. フリードリヒ・フィアラの経歴。A ÚPN, I. správa ZNB, 40194/21. 1955年4月1日付F. フィアラの供述調書；40194/22. フィアラの経歴の翻訳（日付不詳）；Krajská správa [Regional administration] ZNB, S-Štb, S-7202. 1946年10月30日付の内務省委員会第4課によるF. フィアラの尋問調書。Štátny archív (ŠA) Bratislava, Okresný ľudový súd Bratislava 1945-1947 (OĽS Bratislava), [State Archives (SA) Bratislava, District People's Court Bratislava 1945-1947 (OĽS Bratislava),] T ľud 588/1946. 1947年5月19日付F. フィアラの尋問調書。

1950 年代初頭の国家保安部の捜査官の目には，むしろ幾ばくかの信頼を得ようとしてついた意図的な虚言と映った[12]。1945 年以降のほぼすべての証言でフィアラが弁明しようとしたにもかかわらず，彼が政権の犠牲者などでないことは確かである[13]。むしろその反対である。彼は 1938 年 10 月 1 日にナチス・ドイツがズデーテン地方を併合したことを記念する勲章（ズデーテン勲章）を受章し，ジャーナリストとして生計を立てることができるようになったからである[14]。フィアラは生まれ故郷のウィーンには住まずに，リベレツ（ドイツ語の地名はライヘンベルク）［プラハの北東約 110㌔］でヘンラインが率いるズデーテン・ドイツ党の日刊紙『ツァイト（*Die Zeit*）』を発刊する新聞社に勤めた。この新聞の編集者として，彼は 1938 年から 39 年にかけてハノーバーの『日刊ニーダーザクセン新聞（*Niedersächsiche Tageszeitung*）』社で 3 ヶ月間，思想の再教育を受けた後，新帝国領の県庁所在地［1938 年のミュンヘン協定でドイツ領となったライヒスガウ・ズデーテンラント県の県庁所在地ライヘンベルク（リベレツ）］に戻ってきた。どのような諍(いさか)いがあったかは不明であるが，［リベレツを離れた］フィアラは 1939 年 6 月にブラチスラバに赴き，1942 年末まで，ドイツ語日刊紙『国境通信』社に籍を置いた[15]。

2．『国境通信』紙の主筆，ナチス諜報機関の協力者

フィアラがスロバキアの首都［ブラチスラバ］に到着したころまでに，この日刊紙［『国境通信』］は政治傾向やオーナーが変わりはしたが，67 年の歴史があった[16]。ところが，1938 年 11 月になると，ウィーン総督アルトゥール・ザイス・インクヴァルト（Arthur Seyss-Inquart）が，負債もろともこの定期刊行物を買収し，同社の株式 51％をフランツ・カルマシン（Franz Karmasin）が領導するナチス化されたドイツ党（Deutsche Partei: DP）に寄贈した[17]。『国境通信』紙が政治的に極右化したことは，「カルパチアのドイツ人のためのドイツ語新聞」[18] という同紙の新しい副題だけではなく，国家社会主義(ナチス)思想の公然たる推進を目的とした論調，チェコ人への扇情的な攻撃，憎悪に満ちた反ユダヤ的プロパガンダの中に見て取ることができる。社主が

（12）A ÚPN, I. správa ZNB, 40194/22. フィアラの経歴の翻訳（日付不詳）。Cf. ゲッベルスの日記（1938 年 3 月～ 6 月）。Fröhlich, Elke (ed.), *Die Tagebücher von Joseph Goebbels. I. Aufzeichnungen 1923-1941. Band 5: Dezember 1937 – Juli 1938*, München: K. G. Saur, 2000.

（13）フィアラは，とくに，西ドイツの司法当局と向き合ったとき，政権の犠牲者の立場を貫いた。Institut für Zeitgeschichte (IfZ) München, MB 43/1. 1970 年 3 月 23 日と 24 日のフリートリヒ・ボスハマーにたいする刑事訴訟におけるフィアラの証言。

（14）ABS, 10-P-181. 内務省の記録（1961 年 6 月 30 日）。［ズデーテン勲章は併合功労者に授与された。］

（15）SNA, S-428-2/1-12. フリードリヒ・フィアラの経歴。A ÚPN, Krajská správa ZNB, S-Štb, S-7202. 内務省委員会第 4 課による F. フィアラの尋問調書（1946 年 10 月 30 日付）。

（16）Reschat, Gertrud, *Das deutschsprachige politische Zeitungswesen Preßburgs. Unter besonderer Berücksichtigung der Umbruchsperiode 1918/20*, München: Verlag Max Schick, 1942, pp. 43-46, 103-106, 152-155.

（17）Schrifel, David, *Die Rolle Wiens im Prozess der Staatswerdung der Slowakei 1938/39*, Frankfurt am Main: Peter Lang, 2004, p. 28. ［「①ウィーン総督」はオストマルク総督，あるいはオストマルク地方国家管理監などとも。オストマルクはドイツに併合されたオーストリアの新名称。②カルマシンは，ズデーテン・ドイツ党（SdP）と協力関係にあったカルパチア・ドイツ党（die Karpatendeutsche Partei：KdP）創立者の一人。1938 年 10 月，スロバキア自治政府ドイツ民族問題担当国務長官（任命権者はヨゼフ・ティソ）。ユダヤ人迫害に加担。］

（18）See *Grenzbote*, 24 November 1938.

変わり，編集スタッフがパージされた。政治的に好ましくなかったオイゲン・ホリー（Eugen Hollý）に代わって，ザイス＝インクヴァルト子飼いのフェルディナンド・マイスナー＝ホーエンマイス（Ferdinand Meissner-Hohenmais）が主筆に納まった[19]。ところが，マイスナー＝ホーヘンマイスでさえも，主筆には長く留まることが叶わなかった。1939年7月末に，カトリック系の代表的な政治家（ザイス＝インクヴァルトは保守的なカトリックの潮流にいた。）にして，国家社会主義に敵対するフェルディナンド・マイスナー＝ホーエンマイスがイギリスに移住したのである[20]。1939年7月1日からマイスナー＝ホーエンマイスの公式の代理を務めていたフリッツ・フィアラが，空席となっていた主筆の座に直ることができた事情とは，このようなことであった[21]。フィアラが後任になったのは，偶然ではない。非難を受けた前任者とは異なり，親衛隊保安局（Sicherheitsdienst：SD）はフィアラのことを，「オストマルク［旧オーストリア］とズデーテン地方での闘争にあっては」鋼鉄のように強い人物と見ていたからである[22]。

フィアラの指導よろしきを得て，ザイス＝インクヴァルトが過半数の株式を保有していた日刊紙は低迷から脱却し[23]，発行部数を7000部に伸ばしたが（1942年には1万7000部[24]），最も重要なことは，同紙が国家社会主義の政治路線を踏襲すると明確に謳ったことである[25]。親衛隊保安局（SD）ウィーン中央事務所が1939年秋に満足げに述べたように，『国境通信』紙は「フィアラの指導により，スロバキア中の新聞で一番指導力があり，最も情報に富み，最も時宜にかなった新聞になった」のである[26]。しかしながら，この定期刊行物にはまったく問題がなかったかというと，そうではなかった。帝国検閲官がドイツ向けの発行分を，数度に亘って発行禁止処分としたことがある。1941年末には，『国境通信』紙にたいして3ヶ月間の配布差し止め処分が降り，国家警察ウィーン警察署（くみ）は，同紙を政治色の強いカトリックに与する新聞と分類している[27]。こうした出来事は，フィアラにとって何らかの問題を示唆したかもしれない。しかし，フィアラは戦後になってから大げさに言い立てたが，強制収容所に送られるような危険はまったくなかった[28]。1945年以降に好んで強調した反ナチス観な

（19）Schrifel, D., *Die Rolle...*, p. 28.

（20）Národní archiv (NA) Prague, 109-4/341. 1939年9月28日，ボヘミア・モラビア保護領帝国長官付国務長官宛のヘルマン発書簡。ドイツ党出版局の免責条項も参照。*Slovák*, 8 August 1939, p. 4. ABS, 10-P-181. 内務省記録（1961年6月30日付）。

（21）SNA, Národný súd v Bratislave 1945-1947 (NS), Tn ľud 13/1946 – O. Kubala, microfilm II. A 924. 1939年6月23日付のスロバキアにおけるドイツ民族の問題についての政府事務局の記録。

（22）National Archives and Records Administration (NARA), Record group (RG) 242, T-175（親衛隊国家指導者およびドイツ警察長官の記録），roll 541, frame 9 414 812-813. スロバキアのドイツ語新聞にかんする日付不詳の記録。

（23）ザイス＝インクヴァルトは，少なくとも1941年11月までは，この新聞社の株を持ち続けた。次を参照。SNA, 116-11-1/219. ザイス＝インクヴァルト宛のカルマシンの書簡（1941年11月15日付）。

（24）See Reschat, G., *Das deutschsprachige...*, p. 155.

（25）Schriffl, D., *Die Rolle...*, p. 29.

（26）SNA, Alexandrijský archív, microfilm II. C 985, 9 405 735-736. Goldbach Report of 7 October 1939. Also microfilm II. C 970, 9 383 139-141. IdS Administration Vienna, RSHA of 17. October 1939.

（27）SNA, Alexandrijský archív, microfilm II. C 985, 9 405 744. Record of Vienna SD of 11 December 1941; 9 405 748-749. Urbantke Report of Vienna SD (III B) of 16 June 1942.

（28）SNA, S-428-2/1-12. フリードリヒ・フィアラの経歴。A ÚPN, I. správa ZNB, 40194/21. F. フィアラの尋問調書（1955年4月1日）；40194/22. フィアラの経歴の翻訳（日付不詳）；Krajská sprá-

るものに基づいて，フィアラが何かをしたということもない。

それどころか，フィアラは国家社会主義政権と密接な関係を保ち，スロバキアではひとかどのジャーナリストとして働いていた。それだけではない。彼がブラチスラバにやって来たのは，もっぱら諜報の任務を帯びていたからである。入手可能な資料によると，フィアラは，親衛隊保安局（SD）のほかに，国家社会主義ドイツ労働者党（ナチス（NSDAP））のマルティン・ボルマン（Martin Bormann）が代表をしていた党事務所だけでなく，「防衛（Abwehr）」という名称のドイツ軍の防諜組織のためにも働いていた[29]。ドイツからの批判の矢面に立たされていたスロバキア外務大臣兼内務大臣のフェルディナンド・デュルチャンスキー（Ferdinand Ďurčanský）の名誉を損なう重要な役割を担ったのは，十中八九，親衛隊保安局（SD）ウィーン事務所の差し金であろう[30]。スロバキアの内政上の危機が本格化した 1940 年 5 月後半になると，フィアラはベルリンにいるナチスのお偉方に宛ててひっきりなしに文書を送り[31]，その月末には，ウィーン事務所にたいして 14 頁に亘るデュルチャンスキーの名誉を毀損する資料を提出した。2 週間後，それが国家保安本部（Reichssicherheitshauptamt：RSHA）経由で，スロバキア政策を担っていたドイツ外務省に送達された[32]。こうして，この野心的なフリンカ・スロバキア人民党の政治家に引導が渡されるのは，時間の問題になった。それは，1940 年 7 月 28 日，ザルツブルクでのよく知られた状況のもとで行われた[33]。デュルチャンスキーの失脚に積極的に関与したために，フィアラはドイツ帝国外務大臣ヨアヒム・フォン・リッベントロップから内々にお褒めの言葉を貰ったと言われている[34]。

ナチスの諜報機関のためのフィアラの仕事

va ZNB, S-Štb, S-7202. 内務省委員会第 4 課による F. フィアラの尋問調書（1946 年 10 月 30 日）。ŠA Bratislava, OĽS Bratislava, T ľud 588/1946. F. フィアラの供述（1947 年 5 月 19 日）。

(29) Bundesarchiv (BArch) Berlin, ehem. BDC, RuSHA-Akte Konrad Goldbach, Film RS B5236. ゴールドバッハ発帝国保安本部（RSHA）宛書簡（1949 年 2 月 20 日付）；R 70 Slowakei/257, Bl. 75. Administration of Vienna SD, RSHA VI of 30 May 1940. Politisches Archiv Auswärtigen Amtes Berlin (PA AA), R 27659. Killinger Report AA (Luther) of 11 August 1940. SNA, Alexandrijský archív, microfilm II. C 932. スロバキアの政治情勢にかんする数人のエージェントによる報告書。［マルティン・ボルマンは絶大な権力を掌握したヒトラーの個人秘書。1941 年 5 月，ナチス副総統ルドルフ・ヘスがイギリスに逃亡した後，副総統事務所は党官房（Partei-Kanzlei der NSDAP）と改称され，ボルマンは党官房長に就任した。したがって，本文の叙述は 1941 年 5 月以降のことであろう。］

(30) BArch Berlin, ehem. BDC, RSHA-Akte Konrad Goldbach, Film RS B5236. 国家保安本部宛ゴールドバッハ発の書簡（1940 年 2 月 20 日付）。［デュルチャンスキーは反ユダヤ主義者ではあったが，独自路線を標榜するナーストゥップ派（Nástup）（フリンカ・スロバキア人民党の一派閥）の中心人物。ザルツブルク会談（1940 年 7 月）で失脚。脚注 33 参照。］

(31) Nižňanský, Eduard *et al.* (eds.), *Slovensko-nemecké vzťahy 1938–1941 v dokumentoch I. Od Mníchova k vojne proti ZSSR*, [Slovak-German Relations 1938–1941 in Documents I. From Munich to the War against the USSR,] Prešov: Universum, 2009, Document 312, pp. 831–832. BArch Berlin, R 142/85, Bl. 113–114. 1940 年 5 月 22 日付の記録。

(32) NA Prague, 136–77–1. 治安警察，国家保安部（ヨスト（Jost）），外務省（ハビヒト（Habicht））の書簡（1940 年 6 月 16 日付）。

(33) Lipták, Ľubomír, “Príprava a priebeh salzburských rokovaní roku 1940 medzi predstaviteľmi Nemecka a Slovenského štátu,” [“Preparation and Conduct of the Salzburg Negotiations in 1940 between the Representatives of Germany and the Slovak State,”] in: *Historický časopis*, [Historical Journal,] Vol. 13, 1965, No. 3, p. 361. ［ナチス・ドイツとスロバキアの間で行われたザルツブルク会議のこと。これにより，スロバキアはドイツにより傾斜するとともに，反ユダヤ政策を強化した。］

(34) NARA, RG 263（CIA の記録），フェルディナ

は，デュルチャンスキーが不本意にも政治の舞台から退場しただけでは終わらなかった。ボルマンの党事務所と通じていることは，ドイツ大使マンフレート・フォン・キリンガー（Manfred von Killinger）の知るところとなったが[35]，それでもフィアラは党事務所への情報提供を続けた。このことは，1941 年のスロバキアの内政を相当幅広く報告した文書が国家社会主義ドイツ労働者党のトップに送付されたことによって証明されている[36]。ただし，フィアラが親衛隊保安局（SD）や軍の防諜組織［「防衛（Abwehr）」］と間の協力関係をその後も維持したかどうかは分からない。その可能性は大きいが[37]，資料がないので，フィアラの活動範囲にたいするより詳細な復元は不可能である。

フィアラの指導下にあった『国境通信』紙は，あっという間に反ユダヤ新聞の様相を呈するようになった。主筆が論陣の先頭に立って，社説で反ユダヤのプロパガンダを張ったからである[38]。戦後になってから，フィアラは，スロバキア宣伝局とゲッベルスのドイツ宣伝省からの指示に従ったにすぎず，弾圧の恐れがあったので，誰が書いたか分からない悪意に満ちた記事にも署名しなければならなかったと主張した[39]。しかし，それは噴飯の沙汰である。保存されている資料は，それとは真逆のことを物語る証拠となっている。主人たるナチスのイデオロギーと体制への忠誠を見せつけようとするあまり，彼は，指示されていないことまでも買って出ている。1941 年 9 月に人種差別法案が採択されたとき，その新法によって，スロバキアの政治の中にニュルンベルク法が導入されるとして，フィアラは，紛れもなく嬉々として歓迎したのである[40]。それから数ヶ月経った 1942 年の初めには，ユダヤ法の条文が遵守されていないことを公然と批判し，「我々にとって未来永劫，不倶戴天の敵であるユダヤ人へのいかなる協力」であろうとも厳罰に処せと要求した[41]。強制移送が始まる 1942 年 3 月には目先を変えて，教会（とくにプロテスタント教会）がユダヤ人を集団洗礼したことを物笑いの種にした[42]。強制移送の直後には，この措置が唯一の適切な解決策であることを認める一方で，「祖先の出身地に最後の一人が再定住するまでユダヤ人にたいして」断固たる闘争を続けると宣言した[43]。その後も，フィアラは追求の手を緩めなかった。1942

ンド・デュルチャンスキーの個人ファイル。1944 年 9 月 3 日～10 日に実施したフィアラの尋問調書関係分（1944 年 9 月 25 日作成）。

（35）PA AA, R 27659. フォン・キリンガーとマルティン・ルターとの往復書簡（1940 年 8 月 11 日，20 日）。

（36）BArch Berlin, NS 22/626, 1081.

（37）1942 年末，ブラチスラバ駐在ドイツ大使 H. E. ルディンは，フィアラを親衛隊保安局（Sicherheitsdienst: SD）の重要人物とみなしていたが，フィアラはそれを必死に否定しようとした。SNA, Alexandrijský archív, microfilm II. C 985, 9 406 785–786 を参照。親衛隊保安局（SD）ウィーン事務所第 IIIB 部宛のウルバントケ（Urbantke）の報告（1942 年 11 月 7 日付）。戦後，「ユダヤ人問題」の元顧問官 D. ヴィスリチェニーも，彼を親衛隊保安局（SD）の無給協力者としている。以下を参照。Hubenák, Ladislav (ed.), *Riešenie židovskej otázky na Slovensku (1943–1945). Dokumenty 3. časť*, [The Solution of the Jewish Question in Slovakia (1943–1945). Documents Part 3,] Bratislava: SNM-Múzeum židovskej kultúry, 1994, Document 355, p. 236.

（38）たとえば，*Grenzbote*, 17 May 1940, p. 1 を参照。

（39）SNA, S–428–2/1–12. フリードリヒ・フィアラの経歴。A ÚPN, Krajská správa ZNB, S-Štb, S–7202. 内務省委員会第 6 課による F. フィアラの尋問調書（1946 年 10 月 30 日）。ŠA Bratislava, OĽS Bratislava, T ľud 588/1946. F. フィアラの尋問調書（1947 年 5 月 19 日）。

（40）*Grenzbote*, 11 September 1941, p. 1; 14/9/1941, p. 1.

（41）*Grenzbote*, 18 January 1942, p. 1.

（42）*Grenzbote*, 22 March 1942, p. 1.

（43）*Grenzbote*, 29 March 1942, p. 1.

年 8 月に強制移送が一時的に停止されたとき，堕落したとされるユダヤ人は移送されるべきものであり，国内に残留しているすべてのユダヤ人は特別なユダヤ人マークを着用せよ，と強硬に主張した[44]。それと同時に，洗礼証明書および発行済み労働許可証の厳格管理，ならびに『国境通信』紙に掲載した雇用および有効な労働許可にかんするデータに基づく「ユダヤ人人別帳（a Jewish cadastre）」の作成を提案した[45]。

3．ルポルタージュ「東方のユダヤ人とともに」

このような厳しい提案が掲載されたころ，再定住したユダヤ人の運命にかんする報道がスロバキアに届いた。ヨーロッパ向けの BBC 放送による報道[46] だけでなく，移送列車から初めて脱走したユダヤ人の証言もあった[47]。ユダヤ人の大量殺害にかんする情報に反論しようとしたスロバキア政府は，ユダヤ人移送地域への訪問委員会の派遣をドイツ側に要請した。ドイツが派遣したユダヤ人問題顧問官ディーター・ヴィスリチェニー（Dieter Wisliceny）[48] とスロバキア駐在ドイツ大使ハンス・E. ルディン（Hanns E. Ludin）はこの構想を支持したが，強制移送されたユダヤ人のほとんどが殺害されてしまっていたために，「最終解決」担当将校のアドルフ・アイヒマン（Adolf Eichmann）は言下に却下した。腹案を持っていたアイヒマンは，ドイツ国外からの忠実なジャーナリストの訪問を認め，その者にルポルタージュを執筆させて，ユダヤ人の絶滅報道が増え続けていることへの有効な対抗策とすることにした（このことについては，親衛隊全国指導者ハインリヒ・ヒムラー（Heinrich Himmler）に直談判したらしい）。この記者として白羽の矢が立ったのが，フリッツ・フィアラであった[49]。私の考えでは，この人選で決定的な役割を演じたのは，『国境通信』紙の紙面で公然となったフィアラの戦闘的な反ユダヤ主義であり，またフィアラがヒムラー直下の親衛隊保安部（SD）と繋がっていたことであった。

占領下ポーランドへのフィアラの取材旅行は，現在でも謎に包まれている。ただ一つの例外を除けば，公式文書は存在しない。戦後のヴィスリチェニーとフィアラの証言に頼るしかないが，二人の証言には不正確な点が多々あって，とくフィアラの証言には，身の証（あかし）を立てて他の者に責任を転嫁しようとする傾向が強く見られる。その後，ヴィスリチェニーとアイヒマンが死亡して随分と時が経ってしまうと，フィアラは，ドイツの捜査官に新しい作り話を話し続けた。ボンの検察庁に

(44) Nižňanský, Eduard *et al*. (eds.), *Slovensko-nemecké vzťahy 1941–1945 v dokumentoch II. Od vojny proti ZSSR po zánik Slovenskej republiky v roku 1945*, [Slovak-German Relations 1941–1945 in Documents II. From the War against the USSR to the Dissolution of the Slovak Republic in 1945,] Prešov: Universum, 2011, Document 94, p. 347.

(45) *Grenzbote*, 23 August 1942, p. 1.

(46) Cesarani, D., *Adolf Eichmann*..., p. 214.

(47) Kamenec, Ivan, *Po stopách tragédie*, [On the Trail of a Tragedy,] Bratislava: Archa, 1991, p. 191.

(48) D. ヴィスリチェニーについては，以下を参照。Hradská, Katarína, *Prípad Wisliceny (Nacistickí poradcovia a židovská otázka na Slovensku),* [The Wisliceny Case (Nazi Advisers and the Jewish Question in Slovakia),] Bratislava: AEP, 1999; Tönsmeyer, Tatjana, *Das Dritte Reich und die Slowakei 1939–1945. Politischer Alltag zwischen Kooperation und Eigensinn,* Paderborn: Ferdinand Schöningh, 2003, pp. 137–162.

(49) Lipscher, L., *Die Juden*..., p. 135; Kamenec, I, *Po stopách*..., p. 191; Cesarani, D., *Adolf Eichmann*..., p. 214; Stangneth, Bettina, *Eichmann vor Jerusalem. Das unbehelligte Leben eines Massenmörders,* Zürich und Hamburg: Arche, 2011, pp. 62–63.（香月恵理訳『エルサレム〈以前〉のアイヒマン ── 大量殺戮者の平穏な生活』みすず書房，2021 年，59 頁 – 62 頁。）

はその話の裏取りの機会はなかった。裏取りの必要性があるとも考えられなかった。それは，フィアラが刑事告発の対象としてではなく，もっぱらフランツ・カルマシン（Franz Karmasin）[50]，ならびにフリートリヒ・ボスハマー（Friedrich Boßhammer）とオトー・フンシェ（Otto Hunsche）[51]（後二者は帝国保安本部（RSHA）第 IVB 4 課［いわゆる「ユダヤ人課」］に所属していて課長アイヒマンの部下であったことがある）にたいする裁判で検察側証人として出廷したからである。

フィアラの取材旅行にかんして初めてその全体像を述べたのは，ヴィスリチェニーであり，それは 1946 年 7 月のことである。「ユダヤ人問題」のためにスロバキア政府に派遣されたこの顧問官［ヴィスリチェニー］は，フィアラが取材旅行構想の生みの親であると主張した。1942 年の春，強制移送が始まって数週間が経ったころ，『国境通信』紙の主筆は，「東方」のユダヤ人労働収容所を訪問できないか，とヴィスリチェニーに話を持ち掛けた。その目的は，スロバキアの不穏な世論を沈静化することにあると，フィアラが言ったとされる。ヴィスリチェニーはその提案をアイヒマンに取り次いだ。「最終解決」の差配人［アイヒマン］の回答は，その約 2 ヵ月後に届いた。アイヒマンからブラチスラバに掛かってきた電話によれば，フォン・リッベントロップの了解を取り付けたヒムラーは，連合国側のメディアが流布しているユダヤ人の殲滅ということへの反論とするべく，ユダヤ人収容所の状況にかんする宣伝記事を公表するようにと命じたと伝えた。ヴィスリチェニーは，上司アイヒマンから組織を挙げて取材旅行の段取りをするよう命じられた。その後，ヴィスリチェニーはフィアラに視察の条件を通知し，フィアラはその条件とヒムラーの要求（編集原稿の事前提出）に同意した[52]。

ヴィスリチェニーによると，この取材旅行は 1942 年の真夏に行われた。彼らはまずジリナ［ブラチスラバの北東約 195キロメートル］の強制収容センターに立ち寄り，翌日［ポーランドの］カトヴィツェ［ジリナの北約 145キロメートル］に向かった。午前中，フィアラは，ユダヤ人問題担当顧問官［ヴィスリチェニー］と地元秘密警察官と一緒に，ソスノヴィェツ［カトヴィツェの北東約 8 キロメートル］のユダヤ人ゲットーを訪問し，そこでアッパー・シレジア出身のユダヤ人が人道的配慮の下で労働しているさまを見学した。午後 2 時ごろ，一行はアウシュヴィッツ［ソスノヴィェツの南約 33キロメートル］の収容所を訪れた。そこでは，収容所長ルドルフ・ヘス（Rudolf Höß）がフィアラとヴィスリチェニーの来訪を待っていた[53]。簡単に挨拶を交わしてから，ヘスは周到に準備したシナリオに沿って訪問者を案内した。フィアラは，清潔で設備の整った居室，当時としては一般的な衛生設備，厨房，コンサートホール（そこではオーケストラがリハーサルに余念がなかった。）を見学し，引き続き車で付属収容所の一つを訪ねた。ヘスはフィアラを洗濯室に案内した。そこでフィアラは，

（50）IfZ Munich, Gm 07.108, Band 1. ボンの検察当局でのフィアラの証言（1970 年 3 月 9 日）。［カルマシンについては脚注 17 における訳者付記参照。］

（51）IfZ Munich, MB 43/1. フリートリヒ・ボスハマーにたいする刑事裁判におけるフィアラの証言（1970 年 3 月 23 日，24 日）。

（52）IfZ Vienna, WFT-0010. フィアラにかんするヴィスリチェニーの供述（1946 年 7 月 26 日）。ŠA Bratislava, OĽS Bratislava, T ľud 588/1946. ヴィスリチェニーの宣誓供述書（1946 年 7 月 15 日）。

（53）ヘスの伝記的覚書には，フィアラとヴィスリチェニーによる収容所訪問は記載されていない。Broszat, Martin (ed.), *Kommandant in Auschwitz. Autobiographische Aufzeichnungen des Rudolf Höß*, München: Deutscher Taschenbuchverlag, 1963.（ルドルフ・ヘス『アウシュヴィッツ収容所』（片岡啓治訳），講談社学術文庫，1999 年。）

スロバキアから来た女性たちと話をしたり，数枚の写真を撮ったりした[54]。収容所の差配人は，その場にスロバキアのユダヤ人男性を強制的に連れ出して，国家社会主義者の不実極まりないお遊びに付き合わせた。

1946 年と 1947 年に，フィアラは，チェコスロバキアの捜査当局と司法当局にたいしておおむねこのような説明で間違いないと言っている。嫌疑を晴らそうとしたフィアラは，ヴィスリチェニーに進んで働きかけるような密接な交わりはなかったと主張した[55]。フィアラは，自分としては移送されたユダヤ人の運命の本当の姿を確かめたくて，大使ルディンに圧力をかけて取材旅行を実現させたと供述している。こうして，彼は，詐術を弄したナチスによって騙されて，ポチョムキン村［訳注］を見せられた被害者だと自称したのである。その主張の正当性を補強しようとするあまり，フィアラはジリナ強制収容センターの非人間的な状況を批判し，そのことを直接首相ヴォイテフ・トゥカ（Vojtech Tuka）に書面をもって報告したとまで言う始末である[56]。そのような文書が発見されていないことから見ると，フィアラの打算に基づくでっち上げの可能性はかなり高い。

戦後のヴィスリチェニーの証言は比較的信頼できるものの[57]，その話は何とはなしに辻褄が合わない。その最たるものは，フィアラの取材旅行の日程である。フィアラもヴィスリチェニーも，それは真夏（1942 年 8 月）のことだと言っている。しかし，唯一保管されている公文書は，両者の主張を根本から覆（くつがえ）している。1942 年 9 月 1 日にルディンが帝国外務省に送った電報には，取材旅行は遅くとも 9 月 10 日すぎには可能とのくだりがある[58]。これによれば，フィアラは［電報が発信された］その日以降，正確にはその 2 日後にベルリンからの裁可がブラチスラバに届いてはじめて，取材旅行に出かけられるようになったことになる[59]。プロパガンダのためのフィアラの取材旅行の行き先も，あまりはっきりしない。ヴィスリチェニーと

（54）IfZ Vienna, WFT-0010. フィアラにかんするヴィスリチェニーの供述（1946 年 7 月 26 日）。ŠA Bratislava, OĽS Bratislava, T ľud 588/1946. ヴィスリチェニーの宣誓供述書（1946 年 7 月 15 日）。

（55）ヴィスリチェニーは，二人が会ったのは公の場と社交の場だけである，それは間違いないと述べた。1940 年 11 月末の公式会合で，フィアラは，アーリア化にたいするドイツ党への強力な支援をヴィスリケニーに要請したが，ヴィスリチェニーはこれを断り，マイノリティのドイツ人は小規模企業の買収に集中してはどうかと提案した。SNA, 116-51-2/102 を参照。フィアラの覚書（日付不詳）。

［訳注］「ポチョムキン村」とは，1787 年にクリミアを視察するエカテリナ 2 世に，みずからの勲功によって新たな征服地が獲得されたことを信じさせるために，グレゴリー・ポチョムキンがドニプロ川に建設した架空の仮設村落。転じて，「貧相で好ましからざる状態を隠蔽するための見かけ倒しの外観」の意味。（Cf. “Grigory Potemkin,” in the *Digital Britanica*, https: //www. britannica. com/biography/Grigory-Potemkin, accessed on October 22, 2022.)

（56）ŠA Bratislava, OĽS Bratislava, T ľud 588/1946. フィアラの供述（1947 年 5 月 19 日）。A ÚPN, Krajská správa ZNB, S-Štb, S-7202. 内務省第 6 課におけるフィアラの尋問調書（1946 年 10 月 30 日）。SNA, NS, Tn ľud 17/1946 – A. Vašek も参照。アントン・ヴァシェックの本裁判におけるフィアラの証言（この文書を利用させてくれた同僚のヤーン・フラヴィンカ氏にお礼申し上げる）。

（57）Michmann, Dan, “Täteraussagen und Geschichtswissenschaft. Der Fall Dieter Wisliceny und der Entscheidungsprozeß zur Endlösung,” in: Matthäus, Jürgen und Mallmann, Klaus-Michael (eds.), *Deutsche, Juden, Völkermord. Der Holocaust als Geschichte und Gegenwart,* Darmstadt: WBG, 2006, p. 209.

（58）Nižňanský, Eduard (ed.)., *Holokaust na Slovensku 4. Dokumenty nemeckej proveniencie (1939-1945)*, Bratislava: Nadácia Milana Šimečku, 2003, Document 66, pp. 212-213.

（59）PA AA, R 100887. ブラチスラバ駐在大使宛外務省（ルター）発信の電報（1942 年 9 月 12 日）。

フィアラはソスノヴィェツとアウシュヴィッツに行ったと述べている。しかし，前述したルディンの電報によれば，一行の行き先はルブリン県であるが[60]，1942 年にそこに強制移送された[61] ほとんどのスロバキアのユダヤ人は，ラインハルト作戦で殺害されているのである[62]。行き先は土壇場になって変更されたのかもしれない。1942 年 9 月，ルブリン県の殺人マシーンは大車輪で稼働していたので，ヒムラーとアイヒマンは，無許可の人物がそこを動き回っては困ると考えたからであろう。利用可能な資料を見てみても，フィアラがソスノヴィェツとアウシュヴィッツを見学したのか，ルブリン県でゲットーとマイダネク収容所を見学したのかはまったく分からない。フィアラの訪問先を特定することは，間違いなくいくつかの理由で複雑である。フィアラは，記事の最後にルブリン県に移送された人々の名前を掲載しているが[63]，それにたいして，ディオニューズ・レーナルド（Dionýz Lénard）の証言（1943 年）は，フィアラのその記事がでっち上げだと強い調子で疑っている[64]。

しかし，正確な場所がどこであろうとなかろうと，フィアラはその役割を果たした。ブラチスラバに戻った直後に，フィアラは写真入りの記事を数本執筆した。約束のとおり，ヴィスリチェニーは原稿をベルリンのアイヒマンに送った。それが直接ヒムラーの手に渡り，返事は数週間後に来た。親衛隊全国指導者［ヒムラー］は記事の修正を求めたが，ヴィスリチェニーは，フィアラが評判の良いジャーナリストとしての立場にいることを理由にして，首を縦に振らなかった。結局，わずかな修正だけで，1942 年 10 月末にヒムラーは公表を承認した[65]。記事の第一部は 11 月 7 日付の『国境通信』紙に，第二部は

（60）Nižňanský, Eduard (ed.)., *Holokaust na Slovensku 4....*, Document 66, pp. 212–213.

（61）Nižňanský, Eduard (ed.)., *Holokaust na Slovensku 6. Deportácie v roku 1942,* [Holocaust in Slovakia 6. Deportations in 1942,] Bratislava: Nadácia Milana Šimečku, 2005, p. 84.

（62）「ラインハルト」作戦については，以下を参照。Arad, Yitzhak, *Belzec, Sobibor, Treblinka. The Operation Reinhard Death Camps,* Bloomington (Ind.): Indiana University Press, 1987; Browning, Christopher, *Ganz normale Männer. Das Reserve-Polizeibataillon 101 und die "Endlösung" in Polen*, Reinbek bei Hamburg: Rowohlt, 1993: Musiał, Bogdan (ed.): "*Aktion Reinhardt*". *Der Völkermord an den Juden im Generalgouvernement 1941–1944*, Osnabrück: Fibre Verlag, 2004. ［「ラインハルト作戦（Einsatz Reinhard, Aktion Reinhard, Operation Reinhard）」は，ポーランドのユダヤ人 200 万人にたいする絶滅計画である（実行指揮官は親衛隊少将ルブリン県指導者兼警察指導者オディロ・グロボクニク（Odilo Globocnik））。この作戦を遂行するために，ベウゼツ，ソビボル，トレブリンカの 3 ヶ所に絶滅収容所を建設し，1942 年 3 月～1943 年 8 月にユダヤ人，ロマ（ジプシー），ソ連軍捕虜など約 150 万人を殺害した。この作戦の一環としてさらに約 20 万人が殺害されている。この作戦のコード名は，1942 年 1 月に会議を主宰したラインハルト・ハイドリヒ（Reinhard Hydrich）にちなむ。Cf. "Operation Reinhard (Eunsatz Reinhard)," in: *Holocaust Encyclopedia* by the United States Holocaust Memorium Museum, "https://encyclopedia. ushmm. org/content/en/article/operation-reinhard-einsatz-reinhard, accessed on November 23, 2022.]

（63）*Grenzbote*, 10 November 1942, p. 5; Nižňanský, E. (ed.), *Holokaust na Sovensku 6...*, Document 441, pp. 515–516.

（64）Heim, Susanne, Ulrich Herbert, Michael Hollmann, Horst Möller, Gertrud Pickhan, Dieter Pohl, Simone Walther, Andreas Wirsching, (eds.), *Die Verfolgung und Ermordung der europäischen Juden durch das nationalsozialistische Deutschland 1933–1945. Band 9. Polen: Generalgouvernement August 1941–1945*, München: Oldenbourg Verlag, 2014, Document 88, p. 311.

（65）IfZ Vienna, WFT–0010. F. フィアラにかんするヴィスリチェニーの供述（1946 年 7 月 26 日付）。ŠA Bratislava, OĽS Bratislava, Tľud 588/1946. ヴィスリチェニーの宣誓供述書（1946 年 7 月 15 日）。IfZ Munich, MB 43/1. フリートリヒ・ボスハマーにたいする刑事裁判でのフィアラの証言（1970

11 月 8 日付に，第三部は 11 月 10 日に，それぞれ掲載された。記事は，『スロバキアの人々（*Slovák*）』『警固（*Gardista*）』『スロバキアの政治（*Slovenská politika*）』『ハンガリー新聞（*Magyar Hírlap*）』に要約が掲載されるほか，外国の定期刊行物（ルーマニアの『警固（*Gardiste*）』，ベオグラードの『ドナウ新聞（*Donauzeitung*）』，占領下のフランスのドイツ語日刊紙『パリ新聞（*Pariser Zeitung*）』）にも掲載された[(66)]。

3 本の記事はどれをとっても，その筆致は冷酷で，誤解を招くものであって，ありふれた伝統的な反ユダヤ主義と偏見に満ちている。それらの記事に通底しているのは，ユダヤ人を見下げて，仕事ができず何の取り柄もない，人間以下の生き物に貶めようとする小馬鹿にした姿勢である。それと同時に，フィアラは，ユダヤ人問題の解決にたいして果たした国家社会主義者の功績を持ち上げて，ドイツ人担当者による強制移送者への人道的処遇を強調している。記事の中でフィアラは，東方ではユダヤ人が牧歌的な生活を送っていると描き，インタビューに応じた人々の「こんなに良い生活をしたことはありません。」という発言を引用している。聖職者，自治，店舗，適切な食糧配給，十分な衣服提供，ふつうの水準にある衛生環境，満足できる水準の医療を述べる段になって，この茶番は頂点に達する[(67)]。書かれた内容はとてつもない嘘八百であり，ユダヤ人の肉体をこの世から消し去っているとの報道が広まるにつれ，ますます疑念の目で見られるようになった。この取材旅行が目的としたプロパガンダは，その一部しか達成しなかった。疑惑の火消しをするどころか，逆に，多くの疑惑の火にさらに油を注ぐ（そそ）ことになったからである。それにもかかわらず，フィアラの記事は，国家社会主義者の強制収容所への立ち入りを公式に謝絶するときの口実として使われて，その後二年間はアイヒマンの役に立った[(68)]。

4．イスタンブールでの二重スパイと連合国への亡命

あのルポルタージュは，フィアラの主人が期待するようなプロパガンダとしての効果はなかったとしても，ジャーナリストとしてのフィアラのキャリアには箔が付いた。1943 年 1 月に，彼はイスタンブールにあるドイツ帝国外務省の通信社「トランスコンチネント・プレス」の主任特派員に就任したからである[(69)]。当然のことながら，その任務には，諜報活動（トルコの連合国情報網への潜入）も入っていた[(70)]。戦争当事国が丁々発止と策略を凝らす狭間にあった中立国トルコは，枢軸国と連合国の情報戦の戦場になっていた[(71)]。フィアラはスロバキアの状況に精通していたため，ボスポラス海峡に面する都市に居住していたチェコ人やスロバキア人の活動を監視する任務も帯びていた[(72)]。とくに監視の対象になったのは，スロバキアの貿易

年 3 月 24 日)。

(66) IfZ Munich, MB 43/1. Letter from IfZ to the Police President in Berlin of 16/2/1970. Nižňanský, E. (ed.), *Holokaust na Slovensku 6...*, Document 441, p. 517.

(67) *Grenzbote*, 7 November 1942, p. 5; 8. November 1942, p. 5; 10 November 1942, p. 5.

(68) Stangneth, B, *Eichmann vor Jerusalem...*, p. 64.

(69) IfZ Munich, MB 43/1. フリートリヒ・ボスハマーにたいする刑事裁判におけるフィアラの証言（1970 年 2 月 23 日）。ŠA Bratislava, OĽS Bratislava, T ľud 588/1946 も参照。フィアラの尋問（1947 年 5 月 19 日）。A ÚPN, Krajská správa ZNB, S-Štb, S-7202. 内務省委員会第 6 課での F. フィアラの尋問調書（1946 年 10 月 30 日）。このとき，彼が意図していたのは，通信社内での自分の地位を低めようとすることであったと指摘せざるを得ない。

(70) Rubin, B., *Istanbul Intrigues*, pp. 199, 268.

(71) Guttstadt, Corry, *Die Türkei, die Juden und der Holocaust*, Berlin und Hamburg: Assoziation A, 2008, pp. 164-167.

会社（ドヴス社（Dovus））の従業員である。ヒムラーの親衛隊保安局（SD）はロンドンでチェコスロバキアの市民レジスタンスと接触していると疑っていたために，フィアラは彼らを監視することになった。依然として公式には『国境通信』紙の主筆であったフィアラは，数ヶ月間監視した後，1943 年 10 月半ばには「模範（Musterbeispiel）」というタイトルを付けた攻撃的な記事を彼の日刊紙に掲載して，監視の結果を発表した。フィアラは名指しこそしなかったが，半官半民企業の一部従業員がロンドンにある亡命政府とつながっていると厳しく告発した(73)。フィアラの記事によって，二つの危険が生じた。そのひとつは，イスタンブールを舞台にして円滑に行われていたスロバキアとチェコスロバキア［亡命政府］との連絡が機能不全に陥るかもしれない危険である。もう一つは，「保護者」たるドイツ人の目には，スロバキア人民党の政権派閥の情報が漏洩されていると見られるかもしれない危険である。

フィアラは，チェコスロバキア諜報機関のほかに，アメリカ戦略局（Office of Strategic Services：OSS）のために働く情報提供者や諜報部員の情報網（コードネームを「ハナミズキ（Dogwood）」とするアルフレッド･シュワルツ（Alfréd Schwarz）の情報網）にも潜入することができた。フィアラは，筋金入りのアンチ国家社会主義者のふりをして，どうにかしてチェコスロバキア移民の信頼を勝ち取ろうとした。他方で，アルフレッド・シュワルツは，この新人を使って，トルコ駐在ドイツ大使フランツ・フォン・パーペン（Franz von Papen）の事務所への潜入を計画した。

しかし，ダリアことフィアラ（Fiala alias Dália）は，シュワルツの過大な期待には応えられなかった。フィアラの報告は事実の裏付けに欠き，現下の情勢を不正確にしか語ることがなく，ある意味では誤解さえ招くものであった。アメリカ戦略サービス局は，シュワルツに今後はダリア［フィアラ］との接触を禁ずると伝えるとともに，このような得体の知れない人物を信頼するのは，お人好しにも程があると強く叱責（しっせき）した。1944 年 4 月になると，アメリカ軍は自分たちの相手がドイツの諜報員であることをはっきりと知るようになっていたのである(74)。

戦後の裁判で，フィアラは二重スパイではなかったと主張するために，できることは何でもやってのけた。彼はブラチスラバの国民法廷で，連合国への情報提供は私心なく行ったと述べ立てて，その説得に成功した(75)。後になってから，フィアラはイスタンブール事務所の当時の秘書イムリチ・シェーア（Imrich Scheer）によって正体が暴露された(76)。シェーアの証言によれば，フリッツ・フィアラは単なる諜報員どころではなかった。フィアラは，ドイツとトルコのジャーナリストの間に立って情報提供網を管理し，恒常的にベルリン（おそらく 1940 年から勤務していた帝国保安本部（RSHA）第 6 局［海外諜報担当］）と連絡を取っていた。このことは，イスタンブール駐在親衛隊保安局（SD）秘密事務所長（親衛隊中佐）ブルーノ・ヴォルフ（Bruno Wolff），マスコミ担当ウィーン駐

（72）NARA, RG 263, Name File Fritz Koellner. A record of 8 July 1944.

（73）Jablonický, Jozef, *Z ilegality do Povstania (Kapitoly z občianskeho odboja)*, [From Illegality to Uprising (Chapters from the Civil Resistance),] Banská Bystrica: Dali-BB, 2009, pp. 81–82.

（74）Rubin, B., *Istanbul Intrigues*..., p. 199; Bauer, Y., *Freikauf*..., pp. 206–207.

（75）A ÚPN, Krajská správa ZNB, S-Štb, S–7202. 内務省委員会第 6 課での F. フィアラの供述調書（1946 年 10 月 30 日）。ŠA Bratislava, OĽS Bratislava, Ťud 588/1946. F. フィアラの供述（1947 年 5 月 19 日）。

（76）ブラチスラバ地方国民裁判所の判決が，1947 年 8 月末にトルナヴァの秘密警察署で聴取されたシェーアの証言を考慮しなかったのは興味深い。

在親衛隊保安局（SD）フランツ・ロンネベルガー（Franz Ronneberger）などのドイツ秘密情報部の関係者と会っていることから明らかである[77]。

フィアラの連合国への亡命はありきたりの理由からであり，ご都合主義によることは明確と言えよう[78]。1944 年 6 月 6 日の英米軍のノルマンディー上陸の後，彼の目には，明らかに国家社会主義国ドイツの戦勝が不可能に見えたはずである。だからこそ，フィアラは一枚のカードにすべてを賭けて連合国に走ろうと決心した。1944 年 8 月 2 日，トルコがヒトラー・ドイツと断交したことが，そのきっかけであった[79]。フィアラは，諜報活動で培った人脈を生かし，先方がそれまでの活動に興味を示すかもしれないと心得て振る舞った。トルコ警察はフィアラを逮捕し，国外に追放すると脅したが，アメリカ軍の仲介でなんとか身柄の拘留は免れることができた。1944 年 8 月中旬，フィアラはアメリカの軍事情報機関に寝返ることに決めた[80]。その瞬間にフィアラは，ドイツにとって「好ましからざる人物（ペルソナ・ノン・グラータ）」になった。ドイツ帝国報道協会（Reich Association of the German Press）はフィアラの会員資格を剥奪したが，親衛隊保安局（SD）は，この資格剥奪が，敵と称する者の信用を失墜させ，帝国外務省の職を解くのにふさわしい口実になると考えた[81]。

亡命後，フィアラは捕虜となった。アメリカ側は，彼がまだトルコにいたとき（おそらく 1944 年 8 月 18 日～25 日），長時間に亘って尋問した。とくにカルマシンの情報が欲しかったからである[82]。1944 年の 8 月から 9 月に変わるころ，アメリカ戦略局は彼をカイロに連行し[83]，イギリスの情報機関とともにさらに情報を掘り起こそうとした。西側連合国はこの情報を基にして，スロバキアの内政[84]，カルマシン，スロバキア・マイノリティとしてのドイツ人，ナチス化の過程はもとより，当然ながらスロバキアのユダヤ人の悲劇について知識を得たり，それまでの知識を補ったりした。しかし，情報将校は尋問の結果にまったく満足しなかった。ある情報将校は，カルマシンとの関係，ブラチスラバにあるドイツ公館との関係，ユダヤ人の強制移送への関与などについて，フィアラが質問に正直に答えていないのではないかと疑わざるをえないと考えた[85]。フィアラがアメリカ戦略局に提供した空襲目標にかんする情報もまた真実でないことが判明した[86]。戦後になって，フィアラは，徹頭徹尾身を挺して連

（77）A ÚPN, I. správa ZNB, 40194/21. 内務省地方事務所（在ピエシュタニー）が作成した F. フィアラの供述（1956 年 3 月 25 日）。

（78）BArch Berlin, R 70 Slowakei/272, Bl. 258-259. 親衛隊保安局（SD）ウィーン事務所情報第 4 課長の供述（1944 年 6 月 9 日）。

（79）Guttstadt, C., *Die Türkei*..., p. 166.

（80）A ÚPN, I. správa ZNB, 40194/11. 西ドイツ内務省第 1 局第 37 部による F. フィアラにかんする覚書（1973 年 6 月 8 日）。ŠA Bratislava, OĽS Bratislava, Ťud 588/1946 を参照。F. フィアラの尋問調書（1947 年 5 月 19 日）。ヴィルヘルミネ・タム（Wilhelmine Thamm）の宣誓供述書（1947 年 7 月 18 日）。

（81）BArch Berlin, R 100/78. ドイツ帝国報道協会宛帝国政府報道局長の書簡（1944 年 9 月 22 日）；R 70 Slowakei/272, Bl. 258-259. 親衛隊国家保安局（SD）ウィーン情報第 4 課長の供述（1944 年 6 月 9 日）。

（82）NARA, RG 263, Name File Franz Karmasin. A CIA record of 22 November 1954.

（83）(83) SNA, S-428-2/1-12. フリードリヒ・フィアラの経歴。A ÚPN, I. správa ZNB, 40194/21. F. フィアラの証言（1955 年 4 月 1 日）；40194/22. フィアラの経歴の翻訳（日付不詳）；40194/11. 西ドイツ内務省第 1 局第 37 部による F. フィアラにかんする覚書（1973 年 6 月 8 日）。

（84）NARA, RG 263, Name File Ferdinand Durcansky. 中東情報局の記録（抜刷，1944 年 9 月 25 日）。

（85）NARA, RG 263, Name File Franz Karmasin. A CIA record of 22 November 1954.

（86）Rubin, B., *Istanbul Intrigues*, p. 268.

合国の情報機関に協力したと主張したが，事実はそれを強く反証している。

5．チェコスロバキアへの引渡，裁判，判決，西ドイツでのチェコスロバキア防諜の秘密工作

戦後になると，フィアラは連合国にとって無価値の存在になった。それに加えて，捕虜収容所が過密で，イギリスとしては用済みの捕虜は釈放せざるを得なかった。こうして，1945 年の 9 月か 10 月に，イギリスはカイロ駐在チェコスロバキア大使館と連絡を取り，フィアラをチェコスロバキアに引き渡して，刑事裁判にかけることにした。当然ながらプラハ当局はそれに同意した。戦争末期にフィアラを戦犯としてリストアップしていたからである[87]。その間，エルサレム近郊の捕虜収容所に収監されていた『国境通信』紙の元主筆フィアラは，引き渡しを避けようとあらゆる手を尽くした。チェコスロバキアで何が待ち受けているかをよく知っていた彼は，情報提供者か情報将校として採用するよう，ふたたびイギリス側に申し出た[88]。しかし，イギリス情報局は以前にフィアラと付き合っても実りがなかったために，申し出には応じなかった。1946 年 4 月 18 日，イギリス軍はフィアラをカイロに押送し，その 2 日後にはウィーンに連行した。ついにチェコスロバキア当局に引き渡されたのは，1946 年 4 月末のことだった[89]。

フィアラは，アントン・ヴァシェック（Anton Vašek）にたいする国民法廷に検察側証人の一人として出廷し[90]，1946 年 8 月後半までブラチスラバ地方裁判所の拘置所で運命を待っていた。ある意味で彼は幸運であった。国民法廷の主席検事ルドヴィット・リガン（Ľudovít Rigan）は，内務委員と協議して，フィアラをブラチスラバ地方国民法廷に送致することにしたからである[91]。1946 年 10 月末，尋問が内務委員会第 6 部で始まった。大まかに言えば，そこがフィアラの弁護戦略の場になった。彼は，みずからを国家社会主義の敵対者に仕立てて，その犠牲者であると描き，ゲシュタポによる恫喝なるものを誇張し，徹底して終戦時における連合国への協力に焦点を当てようとした[92]。

フィアラは，1947 年 2 月 14 日に開廷した裁判の全期間に亘って，この主張を繰り返した。それは，ブラチスラバやイスタンブールにいる仲間の宣誓供述が証拠になって補強されるはずであった。フィアラは，連合国側の協力者として功績があることに絶えず注目させた。ナチスの強制・絶滅収容所への取材旅行についてのヴィスリチェニーによる不愉快な証言に対抗するためであった。フィアラは，あの記事が掲載されたからには，それがなかったものとすることはできなかった。そこで，アウシュヴィッツを視察したときには，ユダヤ人の絶滅のことは知らなかった，それを知ったのはイスタンブールにいたときだと弁明している。あのような恐ろしいことが分

（87）NA Praha, 316-121-2. 内務省戦犯訴追課の記録（日付不詳）。A ÚPN, Krajská správa ZNB, S-Štb, S-7202. 外務省発内務省 Z/4 課宛外務省発書簡（1945 年 11 月 21 日）。

（88）A ÚPN, Krajská správa ZNB, S-Štb, S-7202. カイロ駐在情報局によるフィアラの提案と書簡（日付不詳）。

（89）ŠA Bratislava, OĽS Bratislava, T ľud 588/1946. フィアラの刑事裁判にたいする主尋問調書（1947 年 12 月 15 日）。

（90）SNA, NS, Tn ľud 17/1946 -A. Vašek. ヴァシェック裁判における主尋問での F. フィアラの証言。

（91）A ÚPN, Krajská správa ZNB, S-Štb, S-7202. 内務委員会第 4 課（第 1 係）の国民法廷の検事宛代理人書簡（1946 年 8 月 22 日）。

（92）A ÚPN, Krajská správa ZNB, S-Štb, S-7202. 1946 年 10 月 30 日の内務委員会（povereníctvo vnútra）第 4 部での F. フィアラの尋問記録。

かったために，連合国に情報提供を申し出ることにしたというのが彼の言い分である[93]。フィアラは，虚言を企んだのである。フィアラは経験豊富で一目置かれていたジャーナリストであるから，ナチスのユダヤ人問題にたいする「最終解決」がどの方向に向かっているのかを見当がついていたはずである。ドイツ党とその準軍事組織である義勇親衛隊（Freiwillige Schutzstaffel）のメンバーであったハインリヒ・K.（Heinrich K.）なる人物が公然と認めているように，「私たちは皆，ユダヤ人が殺されていることを知っていました。少なくともそれが事実だと考えていました。殺し方を知らなかっただけです。」[94]

フィアラは紛らわしい弁明を弄したが，結局，実刑判決は免れなかった。ポーランドへの取材旅行，「東方のユダヤ人とともに」というプロパガンダ記事の執筆刊行，『国境通信』紙上の一連の攻撃的な社説により，1947 年 12 月 15 日のブラチスラバ地方国民法廷の判決は，禁固 10 年と公民権停止 15 年であった。一つの嘘がフィアラを助けることになった。裁判所は，最終の量刑に当たって，私心なく連合国に協力したというフィアラの偽りの証言を情状酌量の根拠としたのである[95]。彼はレオポルドフ［ブラチスラバの北東約 67㌔］，ヤーチモフ［プラハの北西約 130㌔］，ルティニェ・ヴィ・ポドクルコノシ［プラハの北東約 145㌔］の刑務所で服役した[96]。

服役中のフィアラは，チェコスロバキアの情報機関への協力に意欲を示した。早期釈放を目論んだからであろう。レオポルドフ刑務所に収監されていたときは，中東におけるアメリカとイギリスの諜報機関の活動と方法にかんする文書を執筆した[97]。その後，第二次世界大戦中のスロバキアにおける親衛隊保安局（SD），ゲシュタポ，「防衛（Abwehr）」［ドイツ軍の防諜組織］の情報網の復元に進んで参加した。その一方で，フィアラは，共産主義の取調官に取り入ろうとして，躊躇することなく多くの嘘を捏造した[98]。その告げ口のせいで，どれだけ多くの人間が傷ついたことか。1953 年夏には協力関係が密になった国家安全保障局（Štátna bezpečnosť：Štb），［チェコスロバキアの秘密警察，防諜機関。1990 年に解体］は，フィアラを釈放してドイツ連邦共和国［西ドイツ］に送り出すことにした[99]。ボンの連邦報道局（Bundespresseamt）への潜入が任務だったのではないか[100]。

1949 年から 1950 年の変わり目のころに，コンラート・アデナウアー（Konrad Adenauer）［在職 1949 年～1963 年］を首相とする西ドイツは，フィアラの自国送還に関心を示していたが[101]，フィアラがもう一つ別の諜報活動を完了するまでには，ほぼ 2 年が過ぎた。この間，チェコスロバキア国家安全保障局（Štb）は拘束したフィアラを厳しく尋問して，西ドイツでの諜報活動に備えさせていたのである。それは彼の服役中に始まり，1955 年 1 月の出所後も続いた。1955 年 4 月の初め，

（93）ŠA Bratislava, OĽS Bratislava, T ľud 588/1946. F. フィアラへの尋問（1947 年 5 月 19 日）。

（94）IfZ Munich, Gm 07.108, Band 1. IfZ Munich, Gm 07.108, Band 1. ミュンヘンでの検察側証人（H. K.）の尋問調書（1970 年 1 月 19 日）。

（95）ŠA Bratislava, OĽS Bratislava, T ľud 588/1946. 1947 年 12 月 15 日，判決。

（96）A ÚPN, I. správa ZNB, 40194/11. F. フィアラにかんする西ドイツ内務省第 1 局第 37 課の覚書（1973 年 6 月 8 日）。

（97）A ÚPN, I. správa ZNB, 40194. ヤーキモフ国家保安局の記録（1953 年 8 月 15 日）。

（98）A ÚPN, I. správa ZNB, 40194/22. F. フィアラの証言調書（1953 年 6 月 7 日）。

（99）A ÚPN, I. správa ZNB, 40194. ヤーキモフ国家保安局（国家安全保障局（Štb））の記録（1953 年 8 月 8 日）。

（100）A ÚPN, I. správa ZNB, 40194. 内務省第 1 部第 2 課の記録（1953 年 10 月 26 日）。

（101）NA Praha, 316-121-2. 1950 年 1 月 3 日の内務省戦犯訴追課の記録。内務省戦犯訴追課から外務省へのテレックス（日付不詳）。

西ドイツに出国する前に行われた最後の尋問は，プラハ近郊にあった共産主義政権の秘密警察が管理する曰くありげな別荘で行われた。しかし，「従順化」を担当した係官は，その結果に十分には満足していなかった。「彼［フィアラ］は知っていることのすべては語らなかった。」[102] と国家安全保障局（Štb）の係官は記録している。それにもかかわらず，フィアラの西ドイツ行きの道は開かれた。

西ドイツに到着したフィアラは，国家社会主義時代からのコネのおかげで，どうにかボンでジャーナリストの職を就くことができた[103]。1957 年には，西ドイツの首都で働くドイツ・メディアを代表するジャーナリストの団体であるドイツ連邦報道会議（Bundespressekonferenz：BPK）の会員になった[104]。コードネームをヴェルナー（Werner）とするフィアラは，このような立場にあって，西ドイツの政治状況をチェコスロバキア防諜機関に報告した。しかし，フィアラと共産主義防諜機関との協力関係には問題がない，というわけにはゆかなかった。1960 年，秘密諜報員ヴェルナー［フィアラ］は，西ドイツの情報機関であるドイツ連邦情報局（Bundesnachrichtendienst：BND）からチェコスロバキアに通じているのではないかを疑われ，一切の接触が絶たれたからである[105]。おそらくこのときから，フィアラはドイツ連邦情報局の諜報員になったのであろう[106]。1969 年になると，チェコスロバキアの治安当局との連絡が復活され，1980 年代初頭まで断続的に続いた。この間，フィアラはチェコスロバキア国家安全保障局（Štb）の担当者と 177 回も会い，内容も質も異なる無数の情報を文書にして引き渡した。フィアラが引退してしまうと，チェコスロバキアの防諜機関は彼への関心を失った[107]。

6．「褐色」の過去の影

1957 年から 58 年にかけて，ナチス特別分遣隊の旧隊員についての訴訟がウルム［ミュンヘンの西約 157キロメートル］で提起され，また 1958 年末には「国家社会主義者による犯罪捜査のための国立司法行政中央事務局（Zentrale Stelle der Landesjustizverwaltungen zur Aufklärung nationalsozialistischer Verbrechen）」が設置された。これによって，過去のナチスにたいする裁判の行方が西ドイツの司法界だけでなく，衆人の耳目を引くことになった[108]。1961 年のアイヒマン裁判は，ウルムでの訴訟をさらに進める上で大いに貢献したが，「最終解決」の差配人が告発されるという状況の中で，偶然にもフィアラだけでなく，ほとんど忘れられていた，彼のルポルタージュ「東方のユダ

（102）A ÚPN, I. správa ZNB, 40194/21. 1955 年 4 月 4 日の内務省第 1 部第 4 課の記録。

（103）A ÚPN, Krajská správa ZNB, S-Štb, S-7202. フローホヴェツの内務省地域部の記録（1957 年 3 月 14 日）。

（104）Stangneth, B., *Zur Informations-, Freigabe- und Schwärzungs-Praxis...*, p. 14.

（105）A ÚPN, I. správa ZNB, 40194/11. 秘密協力者ヴェルナー（Werner）との協力評価にかんする連邦内務省［西ドイツ内務省］第 1 部第 37 課の記録（1982 年 1 月 26 日）。

（106）Stangneth, B., *Zur Informations-, Freigabe- und Schwärzungs-Praxis...*, p. 13.

（107）脚注 105 に同じ。

（108）Greve, Michael, “Von Auschwitz nach Ludwigsburg. Zu den Ermittlungen der » Zentralen Stelle der Landesjustizverwaltungen zur Aufklärung nationalsozialistischer Gewaltverbrechen« in Ludwigsburg,” in: Wojak, Irmtrud und Meinl, Susanne (eds.), *Im Labyrinth der Schuld. Täter – Opfer – Ankläger*, Frankfurt am Main and New York: Campus Verlag, 2003, pp. 41–63; Eichm Üller, Andreas, “Die strafrechtliche Verfolgung von NS-Verbrechen und die Öffentlichkeit in der frühen Bundesrepublik Deutschland,” in: Osterloh, Jörg und Vollnhals, Clemens (eds.), *NS-Prozesse und deutsche Öffentlichkeit. Besatzungszeit, frühe Bundesrepublik und DDR*, Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 2011, pp. 53–73.

ヤ人とともに」が再びメディアの関心を引くことになった。権威あるドイツ連邦報道会議（Bundespressekonferenz）のメンバーとして，フィアラは不愉快な質問に答えなければならず，スキャンダルに直面してドイツ・ジャーナリスト連盟（Deutscher Journalisten-Verband：DJV）から除名された。『国境通信』紙の元主筆は，ドイツ連邦報道会議の会員資格停止処分でこのスキャンダルをどうにか乗り切ったが[109]，それ以来司法当局から目を付けられるようになった。とうとうフィアラは「褐色」の過去の影に捕らえられたのである。［親衛隊員が着用するシャツの色は褐色だった。］

1962 年，ボン検察庁はフィアラの捜査に着手したが[110]，同年，証拠不十分で起訴を断念した。その後数年間は，フィアラは，［検察側］証人として司法当局に出頭するだけだった。具体的に言うと，スロバキアでの元上司カルマシンにたいする予審（1970 年 3 月），およびフィアラが執筆した悪名高いあの記事の掲載について 1942 年 10 月にウィーンでヴィスリチェニーと論争したフリードリヒ・ボスハマーにたいする刑事訴追のときである[111]。尋問にたいするフィアラの供述は，当時の出来事にたいする戦後の見解に基づいていた。ヴィスリチェニーとアイヒマンの二人がもう生きていないことを奇貨として，フィアラは虚々実々を織り交ぜ嘘で味付けた証言を繰り出し，スペインとフランスからさらに二人のジャーナリストが取材旅行に加わったこと，この二人を視察団に密かに忍び込ませたのはヨゼフ・ティソ（Jozef Tiso）であること，そしてブラチスラバに戻ってからは，この取材旅行の印象を大統領ティソとトゥカ政権のお偉方に報告したこと，を主張した。カルマシンとボスハマーのどちらの証人尋問でも，フィアラは「無実で何も知らない犠牲者」[112] という立場にあることを忘れず強調するとともに，適切にもフィアラのことを「みずからのジャーナリストとしての好奇心と当時信じていたものの犠牲者」[113] と断じたヴィスリチェニーのことを大した人物ではなかったと小馬鹿にするようなこともあった。フィアラは，スロバキアからのユダヤ人の再定住に賛成であったことを認めたが，それだからと言って，ドイツの司法から重ねて刑事告発されることはなかった[114]。「東方のユダヤ人とともに」という不名誉な記事の執筆者は，ドイツ・キリスト教民主同盟に近い日刊紙『ザールブリュッケン新聞（*Saarbrückener Zeitung*）』でジャーナリストとして平穏に仕事を続けることができた。1970 年にはドイツ連邦報道会議の会員資格を更新し，1998 年か 1999 年まではその会員であり続けた[115]。

（109）Krüger, Gunnar, “Wir sind doch kein exklusiver Club!” in: *Die Bundespressekonferenz in der Ära Adenauer*, Münster: LIT Verlag, 2005, pp. 111-114. ABS, 10-P-181 も参照。1961 年 6 月 30 日付の内務省から内政部への書簡。

（110）IfZ Munich, Gm 07.108, Band 1. ボンにおける検察側証人としてのフィアラの証言（1970 年 3 月 9 日）。

（111）IfZ Vienna, WFT-0010. フィアラについてのヴィスリチェニーの供述（1946 年 7 月 26 日）。ŠA Bratislava, OĽS Bratislava, T ľud 588/1946. ヴィスリチェニーの宣誓供述（1946 年 7 月 15 日）。

（112）IfZ Munich, MB 43/1. フリートリッヒ・ボスハマーにたいする刑事訴訟におけるフィアラの証言（1970 年 3 月 24 日）。

（113）IfZ Vienna, WFT-0010. F. フィアラにかんするヴィスリチェニーの供述（1946 年 7 月 26 日）。ŠA Bratislava, OĽS Bratislava, T ľud 588/1946. ヴィスリチェニーの宣誓陳述（1946 年 7 月 15 日）。

（114）IfZ Munich, Gm 07.108, Band 1. ボンにおける検察側証人フィアラの証言（1970 年 3 月 9 日）。

（115）Krüger, G., “Wir sind doch kein exklusiver Club!” p. 114.

文　献　等

公文書館

Bundesarchiv Berlin (BArch Berlin)

National Archives and Records Administration (NARA)

Slovenský národný archív (SNA) [Slovak National Archives]

Národní archiv Praha (NA Praha) [National Archives Prague]

Archív Ústavu pamäti národa (A ÚPN) [Archives of the Institute of Memories of the Nation]

Archiv bezpečnostních složek (ABS) [Archives of the Security Forces Archives]

Politisches Archiv Auswärtigen Amtes Berlin (PA AA)

Štátny archív v Bratislave (ŠA Bratislava) [State Archives in Bratislava]

Institut für Zeitgeschichte München (IfZ Munich)

Institut für Zeitgeschichte Wien (IfZ Vienna)

定期刊行物

Grenzbote

Slovák [Slovak]. The newspaper issued by Hlinka's Slovak People's Party (Slovak: Hlinkova slovenská ľudová strana: HSL'S)

参考文献

Arad, Yitzhak, *Belzec, Sobibor, Treblinka. The Operation Reinhard Death Camps,* Bloomington (Ind.): Indiana University Press, 1987.

Bauer, Yehuda, *Freikauf von Juden? Verhandlungen zwischen dem nationalsozialistischen Deutschland und jüdischen Repräsentanten von 1933 bis 1945*. Frankfurt am Main: Jüdischer Verlag, 1996.

Broszat, Martin (ed.), *Kommandant in Auschwitz. Autobiographische Aufzeichnungen des Rudolf Höß,* München: Deutscher Taschenbuchverlag, 1963.

Browning, Christopher, *Ganz normale Männer. Das Reserve-Polizeibataillon 101 und die "Endlösung" in Polen*, Reinbek bei Hamburg: Rowohlt, 1993.

Eichmüller, Andreas, Die strafrechtliche Verfolgung von NS-Verbrechen und die Öffentlichkeit in der frühen Bundesrepublik Deutschland. In Osterloh, Jörg und Vollenhals, Clemens (eds.). *NS-Prozesse und deutsche Öffentlichkeit. Besatzungszeit, frühe Bundesrepublik und DDR*. Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 2011.

Fröhlich, Elke (ed.), *Die Tagebücher von Joseph Goebbels. I. Aufzeichnungen 1923-1941. Band 5: Dezember 1937 – Juli 1938*. München: K. G. Saur, 2000.

Greve, Michael, Von Auschwitz nach Ludwigsburg. Zu den Ermittlungen der »Zentralen Stelle der Landesjustizverwaltungen zur Aufklärung nationalsozialistischer Gewaltverbrechen« in Ludwigsburg. In Wojak, Irmtrud und Meinl, Susanne (eds.). *Im Labyrinth der Schuld. Täter – Opfer – Ankläger*. Frankfurt am Main – New York: Campus Verlag, 2003, S. 41–63.

Heim, Susanne, Ulrich Herbert, Michael Hollmann, Horst Möller, Raul Hilberg (eds.), *Vernichtung der europäischen Juden. Band 2*, Frankfurt am Main: Fischer Taschenbuch Verlag, 1990.

Heim, Susanne, Ulrich Herbert, Michael Hollmann, Horst Möller, Gertrud Pickhan, Dieter Pohl, Simone Walther, Andreas Wirsching, (eds.), *Die Verfolgung und Ermordung der europäischen Juden durch das nationalsozialistische Deutschland 1933-1945. Band 9. Polen: Generalgouvernement August 1941-1945*, München: Oldenbourg Verlag, 2014.

Hradská, Katarína, *Prípad Wisliceny (Nacistickí poradcovia a židovská otázka na Slovensku),* [The Wisliceny Case (Nazi Advisers and the Jewish Question in Slovakia),] Bratislava: AEP, 1999

Hubenák, Ladislav (ed.), *Riešenie židovskej otázky na Slovensku (1943−1945). Dokumenty 3. časť.* [The Solution of the Jewish Question in Slovakia (1943−1945). Documents Part 3.] Bratislava: SNM-Múzeum židovskej kultúry, 1994.

Jablonický, Jozef, *Z ilegality do Povstania (Kapitoly z občianskeho odboja)*, [From Illegality to Uprising (Chapters from the Civil Resistance),] Banská Bystrica: Dali-BB, 2009.

Jäckel, Eberhard und Longerich, Peter (eds.), *Enzyklopädie des Holocaust. Band I*, München: Pipper, 1995.

Kamenec, Ivan, *Po stopách tragédie*, [On the Trail of a Tragedy,] Bratislava: Archa, 1991.

Krüger, Gunnar, "Wir sind doch kein exklusiver Club!" in: *Die Bundespressekonferenz in der Ära Adenauer*, Münster: LIT Verlag, 2005.

Lipscher, Ladislav, *Die Juden im Slowakischen Staat*, München: R. Oldenburg Verlag, 1980.

Lipták, Ľubomír, "Príprava a priebeh salzburských rokovaní roku 1940 medzi predstaviteľmi Nemecka a Slovenského štátu," ["Preparation and Conduct of the Salzburg Negotiations in 1940 between the Representatives of Germany and the Slovak State,"] in: *Historický časopis*, [Historical Journal,] Vol. 13, 1965, No. 3.

Lozowick, Yaacov, *Hitlers Bürokraten. Eichmann, seine willigen Vollstrecker und die Banalität des Bösen*, München: Pendo Verlag, 2000.

Michmann, Dan, „Täteraussagen und Geschichtswissenschaft. Der Fall Dieter Wisliceny und der Entscheidungsprozeß zur Endlösung", in: Matthäus, Jürgen und Mallmann, Klaus-Michael (eds.), *Deutsche, Juden, Völkermord. Der Holocaust als Geschichte und Gegenwart,* Darmstadt: WBG, 2006.

Musiał, Bogdan (ed.), *„Aktion Reinhardt". Der Völkermord an den Juden im Generalgouvernement 1941-1944*, Osnabrück: Fibre Verlag, 2004.

Nižňanský, Eduard (ed.), *Holokaust na Slovensku 4. Dokumenty nemeckej proveniencie (1939-1945)*, [Holocaust in Slovakia 4. Documents of German Provenance (1939−1945),] Bratislava: Nadácia Milana Šimečku, 2003.

Nižňanský, Eduard *et al*. (eds.), *Slovensko-nemecké vzťahy 1938-1941 v dokumentoch I. Od Mníchova k vojne proti ZSSR*, [Slovak-German Relations 1938−1941 in Documents I. From Munich to the War against the USSR,] Prešov: Universum, 2009.

Nižňanský, Eduard *et al*. (eds.), *Slovensko-nemecké vzťahy 1941-1945 v dokumentoch II. Od vojny proti ZSSR po zánik Slovenskej republiky v roku 1945*, [Slovak-German Relations 1941−1945 in Documents II. From the War against the USSR to the Dissolution of the Slovak Republic in 1945,] Prešov: Universum, 2011, Document 94.

Pickhan, Gertrud, Dieter Pohl, Simone Walther, Andreas Wirsching (eds.), *Die Verfolgung und Ermordung der europäischen Juden durch das nationalsozialistische Deutschland 1933-1945. Band 9. Polen: Generalgouvernement August 1941-1945*, München: Oldenbourg Verlag, 2014.

Reschat, Gertrud, *Das deutschsprachige politische Zeitungswesen Preßburgs. Unter besonderer Berücksichtigung der Umbruchsperiode 1918/20*, München: Verlag Max Schick, 1942.

Rubin, Barry, *Istanbul Intrigues*, New York: Pharos Books, 1992.

Schriffl, David. *Die Rolle Wiens im Prozess der Staatswerdung der Slowakei 1938/39*, Frankfurt am Main: Peter Lang, 2004.

Stangneth, Bettina, Zur Informations-, Freigabe- und Schwärzungs-Praxis des Bundesnachrichtendienstes im Fall der BND-Akten mit Bezug zu Adolf Eichmann, S. 13–15. Available online: <http://kanzlei-partsch.de/de/cjp/wp-content/uploads/2010/07/130622-ASV-20-Stangneth.pdf.>

Tesařová, Michaela, *Zánik německého tisku na Karlovarsku v letech 1938 a 1945*. Diplomová práca, [The Disappearance of the German Press in Karlovy Vary in 1938 and 1945. Diploma thesis,] Univerzita Karlova (Prague): Fakulta sociálnych vied, 2013.

Tönsmeyer, Tatjana, *Das Dritte Reich und die Slowakei 1939-1945. Politischer Alltag zwischen Kooperation und Eigensinn,* Paderborn: Ferdinand Schöningh, 2003.

Vollnhals, Clemens (eds.), *NS-Prozesse und deutsche Öffentlichkeit. Besatzungszeit, frühe Bundesrepublik und DDR*, Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 2011.